

《担当者名》○才川悦子 saikawa@hoku-iryo-u.ac.jp 高野賢一

【概要】

耳鼻咽喉科学は、聴覚音声言語によるコミュニケーションにおける入力～出力系の先端にある「みみ、はな、のど」の病態を学ぶものであり、言語聴覚士の業務に直結する臨床科目である。第一学年で履修した「解剖生理学」、「音響学」、「音声言語聴覚医学」によって、必要な解剖、生理を理解しているとの前提のもとに、ここでは、病理、臨床に重点をおき、疾患学、診断治療学を履修する。

【学修目標】

<一般目標>

- 1.耳鼻咽喉科、頭頸部外科領域の疾患について、病態、診断、治療を生理学的・病理学的観点から説明できる。
- 2.医療人、言語聴覚士として、聴覚音声言語障害の診断治療を理論的に構築する能力を身につけるために、「みみ、はな、のど」の病態を理解する。

<行動目標>

- 1.聴覚路の解剖生理学に基づき、伝音性、感音性聴覚障害の細分類と病態を説明できる。
- 2.聴覚障害の原因疾患を部位、病因、病態ごとに理解し、それぞれの聴覚障害の特徴と、治療的対応を説明できる。
- 3.鼻副鼻腔の解剖生理学に基づき、部位、病因、病態ごとに鼻科疾患を説明できる。
- 4.鼻科疾患と聴覚言語障害の関係を説明できる。
- 5.口腔咽頭の解剖生理に基づき、運動障害、形成異常、組織欠損を来す口腔咽頭疾患と、これらによる構音障害の病態を説明できる。
- 6.喉頭の解剖生理に基づき、嚥声の成因を声帯振動に関連づけて説明できる。
- 7.音声障害の検査法の概要を理解し、実技に応用できる知識を身につける。
- 8.音声障害の原因疾患を、部位、病因、病態ごとに理解し、治療的対応を説明できる。
- 9.主に気道管理に関わる問題について、耳鼻咽喉科領域の救急的対応を理解し、現場で適切な行動ができる知識を身につける。

【学修内容】

回	テーマ	授業内容および学修課題	担当者
1	オリエンテーション	授業の目標と全体の流れを把握する。ことばの鎖 (Speech Chain) の概念と耳鼻咽喉科領域との関連を理解する。	才川悦子
2	耳科学総論	伝音系、内耳、中枢聴覚路の解剖生理を復習し、音響知覚をエネルギー伝達と周波数分析の観点から理解する。	才川悦子
3	耳科学各論	伝音難聴を来す疾患の病態を知り、それぞれの聴覚病理的特徴を理解する。 オーディオグラムの概念を学ぶ。	才川悦子
4	耳科学各論	感音難聴を来す疾患の病態を知り、それぞれの聴覚病理的特徴を理解する。 遺伝難聴について学ぶ。	才川悦子
5	耳科学各論	補聴と人工内耳の医学的側面を学ぶ。	才川悦子
6	耳科学各論	前庭・平衡系の構造・機能について学ぶ。 めまいを来す疾患について学ぶ。 顔面神経麻痺について学ぶ。	才川悦子
7	耳科学外科的治療	耳科疾患に対する外科的治療を学ぶ。	才川悦子 高野賢一
8	鼻科学	鼻副鼻腔の解剖生理を復習し、鼻科疾患の概要を学ぶ。	才川悦子
9	咽頭科学総論	口腔咽頭の解剖生理を復習し、構音、嚥下、嚥下障害との関連を学ぶ。	才川悦子
10	咽頭科学各論	咽頭疾患の病態と治療について学ぶ。	才川悦子
11	喉頭科学総論	喉頭の解剖生理を再確認する。 発声発語の音源としての喉頭機能を理解し、構音と発声の関係を学ぶ。	才川悦子

回	テーマ	授業内容および学修課題	担当者
12	喉頭科学各論	喉頭の良性疾患の病態とその治療について学ぶ。	才川悦子
13	頭頸部腫瘍科学	頭頸部の悪性腫瘍を中心とした病態と治療について学ぶ	才川悦子
14	気管食道科学	気管切開を伴う病態と気道管理について学ぶ。 嚥下運動のしくみの確認と嚥下障害の臨床像、外科的治療法について学ぶ。	才川悦子
15	まとめ	全体のまとめ 学習内容の理解度を確認する。	才川悦子

【授業実施形態】

面接授業

授業実施形態は、各学部（研究科）、学校の授業実施方針による

【評価方法】

定期試験 90% 小テスト10%

【教科書】

落合慈之 他 著 「耳鼻咽喉科疾患ビジュアルブック」第2版 学研メディカル秀潤社 2018年

【参考書】

医療情報研究所 編 「病気がみえる vol.13 耳鼻咽喉科 第1版」 メディックメディア 2020年

切替一郎 著 「新耳鼻咽喉科学」第12版 南山堂 2022年

森満保 著 「イラスト耳鼻咽喉科」第4版 文光堂 2012年

【備考】

・授業内容の理解度確認のために随時チェックを行う。

【学修の準備】

耳鼻咽喉科学の国家試験出題範囲は非常に広い。本講義でその全てを網羅することは出来ないので、教科書、参考書を熟読し、試験には講義内容に限らず全般的な知識を獲得して臨むことを勧める。

臨床科目であり、疾患名、病態、治療等について、絶対的な基準が定まっていない項目が多々ある。試験には講義内容とともに教科書の記載を基準とする出題を行うが、臨床医学が常に仮説 検証を繰り返して進歩していくものであることを理解して学習を進めること。

予習復習合わせて160分以上。

【ディプロマ・ポリシー（学位授与方針）との関連】

（DP3）言語聴覚士として必要な科学的知識や技術を備え、心身に障害を有する人、障害の発生が予測される人、さらにはそれらの人々が営む生活に対して、地域包括ケアの視点から適切に対処できる実践的能力を身につけている。

【実務経験】

才川悦子（医師）

高野賢一（医師）

【実務経験を活かした教育内容】

耳鼻咽喉科医師としての医療機関での実務経験をもとに、耳鼻咽喉科、頭頸部外科領域の疾患について、病態、診断、治療を生理学的・病理学的観点から説明することができ、医療人、言語聴覚士として、聴覚音声言語障害の診断治療を理論的に構築する能力を身につけることのできるような教育を行う。